

NST 介入時における亜鉛値の検討

NST 介入時の検査項目と比較して

◎原田 雅章¹⁾、柴田 洋綺¹⁾、岸 香織里¹⁾、亀山 拓哉¹⁾
島田市立総合医療センター¹⁾

【目的】当院は 2005 年より NST を稼働させた。稼働当初に行っていた検査項目はプレアルブミンをはじめとした蛋白項目、ヘモグロビン、リンパ球数であった。近年、亜鉛やセレンなどの微量元素の重要性が注目されてきたため、2019 年より NST 介入時に亜鉛の測定を行うことを開始した。必須微量元素である亜鉛は蛋白代謝や遺伝情報の伝達に重要な役割を果たしており、亜鉛欠乏によりさまざまな症状が現れるとされている。今回、NST 介入時に亜鉛の測定を開始するにあたり、亜鉛とその他栄養指標に用いられる検査項目について比較検討したので報告する。

【方法】2019 年 9 月から 2020 年 8 月までに NST 介入依頼のあった 126 名について TP、ALB、プレアルブミン、ChE、ALP の 5 項目を測定し亜鉛と比較した。また亜鉛を継続的に測定できた症例 22 名について検討を行った。

【結果】初回介入時の各項目の平均値は年齢 78.5 歳、亜鉛：68.3 $\mu\text{g/mL}$ 、ALB：2.76 mg/dL 、TP：6.23 g/dL 、ChE：159.4 U/L、P-ALB：13.0 mg/dL 、ALP：306.4 U/L

であった。各項目と亜鉛の相関係数は ALB：0.419、TP：0.287、ChE：0.357、P-ALB：0.462 であった。

継続測定を行えた症例については亜鉛値上昇：12 例、亜鉛値変化なし：7 例、亜鉛値低下：3 例であった。

【結語】亜鉛測定開始前は NST 介入患者で亜鉛を測定した件数は 0 件であったが、2023 年では 188 件の亜鉛の測定を行っていた。NST 介入患者は高齢で低アルブミン血症を伴い、亜鉛値が基準値を下回った方が、126 名中 87 名存在した。また、比較検討した項目では亜鉛は ALB と P-ALB に弱い相関を認めた。また亜鉛を継続的に摂取出来ていれば亜鉛値の上昇は見られたが、褥瘡や下痢が見られた症例では亜鉛値が低下または変化なしとなった。今回 NST 介入患者に亜鉛の測定を開始したことにより、亜鉛値低値の患者の把握ができるようになったことは臨床支援につながるものと考えられた。

連絡先 0547-35-2111 内線 2203